ちいきジャパン

23

秋田スギ
利活用推進
福祉特区

木の香りと温もりに包まれた“老人ホーム”が登場

秋田県男鹿（おが）市にオープンした有料老人ホーム「ケアホーム木精（もくせい）」。吹き抜けの天井に秋田スギを活用した梁が見え、やわらかい雰囲気を与えている。

豊かな森林資源に恵まれる秋田県は、良質な建築用材として知られる秋田スギの造林と育成に力を注いでおり、スギ人工林は全国一の広さを誇る。一方で、近年、木造家屋の需要低迷や安価な外材の台頭で県内の製材品出荷数は減少の一途をたどり、木材関連産業は深刻な打撃を受けていた。そこで県は、特区制度を活用して、これまで認められていなかった木造の福祉施設を建設できるようにした。今年3月、その適用を受けた老人ホームがオープンし、秋田スギ利活用の新たなモデルケースとして注目を集めている。

秋田スギ利活用推進福祉特区

木造の有料老人ホームで耐火・準耐火の制約を除く

特区で認められた内容

▶ 有料老人ホームなど社会福祉施設について、平屋建てであれば、スプリンクラーの設置や避難口の増設などの安全対策を組み合わせて総合的に判断し、木造でも耐火および準耐火建築物の規定を適用されないで済む。

特区適用第一号は、それだけでニュースになる。2005年3月10日、秋田県男鹿市にある「ケアホーム木精」のオープンにも、NHKなどテレビ局3社と新聞社4社が取材に訪れた。「秋田スギ利活用推進福祉特区」（以下、秋田スギ特区）の適用第一号だったからだ。翌日の新聞やテレビニュースでは、秋田杉を使った木造の介護付き有料老人ホームの開業が報道された。

ケアホーム木精を運営する日本ケアシステムの平野昇司代表は「ここまで報道されるとは予想していなかった。宣伝効果は非常に大きい」と喜ぶ。

秋田県は日本一の「杉の人工林面積・蓄積」を誇る。その数、約23万本。生産利用期はここ数年でピークを迎える。しかし、2003年の秋田杉製材品出荷量は約26万7000m³と、1993年に比べて約27万m³減少した。現在も、緩やかながら減少の一途をたどる。

地元建築家らが特区構想を提案

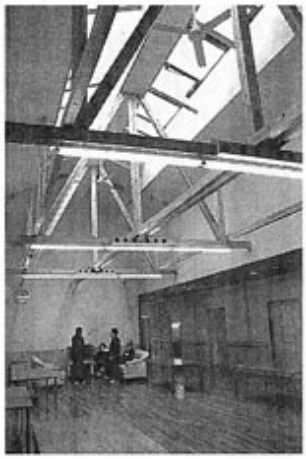
製材の出荷量が減り続ける秋田杉を有効利用して地場産業の活性化を図るため、木造の高齢者福祉施設の建設を促進できるように厚労省の基準を緩和してもらいたい――。こう考えて特区構想を提案したのは、地元建築設計者や木材業者、県職員らからなる「秋田スギの利活用を考える会」だった。

同会が特区推進本部に、「秋田スギ利

ケアホーム木精（秋田県男鹿市）

談話コーナー。天井部に秋田杉を使った構造が見える。居室の扉などにもスプルス材を使い、木の温もりを感じられるようにした。天井部には難燃材を使用する必要があり、石こうボードを使用した

（写真：特記以外は鈴木秀江）



秋田スギ特区で老人ホーム完成

男鹿

社会福祉施設の耐火構造基準を緩和し、秋田スギを建築材として利用できるようにした構造改革特区、「秋田スギ利活用推進福祉特区」（秋田スギ特区）の第1号が男鹿市船越に誕生し、5日、完工記念式典が開かれた。介護付き有料老人ホーム「ケアホーム木精（もくせい）」で、無機質な鉄骨やコンクリートではなく、温かみのある木材に囲まれ、入居者の心身に優しい空間になっている。10日に開所する。

防火策充実で木造認可

秋田スギ特区は、男鹿市を特区区域として県が国に申請し、昨年6月に認定された。

社会福祉施設は、厚生労働省の省令などで、鉄筋コンクリートなどの耐火建築物か準耐火建築物であることが義務づけられており、木造の施設は認められていない。

だが「秋田スギ特区」は、スプリンクラーなど初期消火設備を充実させ、訓練や防火管理の体制も強化することで、木造での建築が認められた。

施設を運営する日本ケアシステム（男鹿市）によると、「ケアホーム木精」は木造平屋建てで、延べ床面積約2790平方㍍。総工費は約4億1千万円。個室50室を備え、すでに30人以上の入居が決定しているという。

750立方㍍のスギの建築材を使い、構造材はもちろん、床や壁にもスギを使っている。天窓も多く、室内は明るい。

一方で、防火対策として、廊下と全室にスプリンクラーを完備。調理室とボイラー室、居室3室ごとに延焼防火壁も設けてある。3棟ある建物の延焼を防ぐため、それぞれをつなぐ渡り廊下には防火扉も設置している。

外への避難口へは、どの居室からでも30㍍以内になっており、避難訓練も年3度行うという。

そもそも、この特区は民間組織「秋田スギの利活用を考える会」（秋田市）が提案した。

秋田県は65歳以上人口が30万人を超え、高齢化率は26・2％（昨年10月、県統計課調べ）に上る。介護保険施設も不足する中、同会会長の小野泰太郎さん(60)が、秋田の豊富な森林資源を利用して介護施設を建てることを考えついた。

「自然素材の木はマイナスイオンを発し、コンクリートなどより人間になじみやすく、温かみのある建物になる」と、小野さん。自ら設計も担当したという。

5日の記念式典には佐藤一誠男鹿市長も出席。「男鹿市は街づくりの基本に福祉政策をあげており、スギを利用した施設ができたことは誠に意義深い」と祝辞を述べた。

上床やテーブルもスギの木で造られている。天窓も多く室内は明るい下施設は木造平屋建て。内部はスギの木が前面に出た造りになっている＝いずれも男鹿市船越で